資料

学生の意欲を引き出す臨地実習の取り組み　第2報

手　嶋　哲　子・田　中　律　子・木　藤　宏　子・西　尾　久美子・小　塚　美由記

Practical field training draws the university student's volition the second report

TEJIMA Tetsuko, TANAKA Ritsuko, KITO Hiroko, NISHIO Kumiko and KOZUKA Miyuki

Abstract: International Confederation of Dietetic Association requires a minimum of 500 hours of study which has caused Japan to examine and find a good way to train students. A survey was taken to find an effective way to study to make up for the requirement in a shorter period of time. Field training was considered to be good way to achieve the objective. Different places of field study gave different image of a dietitian and the desire to work to the students. The field study also provided students with a wide variety of experiences. Talking with the people in the field and studying to prepare for the field study resulted in satisfaction and understanding of the goal of the field study which connected to the work of a registered dietitian. The field training deepened the learning and cooperation in each field. It attempted to unite the education with hand-on activities which was important. Also, with different experiences and personal initiative, the aspiration became higher.

緒言

管理栄養士養成課程における「臨地実習」は専門科目で学んだ知識及び技術の統合を図ることを目的する管理栄養士の実践教育科目として重要な位置を占めている。特に、管理栄養士の業務は従来の献立・食品・栄養成分といったモノ中心の業務から、実際に生活し、人間の自立した食生活や健康を維持するための栄養ケアを支援するという、ヒトを中心とした業務への転換を図ろうとするところに重点が置かれており、臨地実習はその実践力を身につけるための重要な役割をなすもの[1)]である。

第14回国際栄養士会議（2004年シカゴ）で、国際栄養士連盟（International Confederation of Dietetic Association, IDAC）は、栄養士としての基礎教育レベルに関する国際的スタンダードとして２つの目標を掲げた。その１つが「最低500時間は、スーパーバイザーの指導のもと専門的な臨地実習を行うこと」[2)]であり「世界の食物と栄養改善に貢献するには、世界中に栄養に関する有能な専門家が必要であり、このことは社会の責任である」ことが確認され[2)]、日本の養成においても検討を求められている。

このことは、高度な栄養学の知識を得ているだけでは管理栄養士の職務を果すことは困難であることと、社会に貢献できる管理栄養士を養成するためには、何を学び、何を身につけさせるのかを養成教育と実践活動の融合を図りながら進められることを意味している。さらに、臨地実習の教育効果を上げるためには、単に業務体験の時間数を増加するだけではなく臨地実習の事前・事後指導の充実や現場の職務にあった実践的な養成教育が行われることにもつながっていくものと考える。

本学における「臨地実習」では、栄養士法で規定されている「管理栄養士養成施設が行うべき臨

北海道文教大学人間科学部健康栄養学科

地実習の単位数４単位（160時間）を必修科目として設定している。「給食経営管理論」「臨床栄養学」「公衆栄養学」の各分野の単位配分については、2003年の改組転換時に設定したものを社会情勢や実習施設の確保、学生の学びを踏まえて2007年度にカリキュラム変更（以下　新カリキュラムとする）を行った。

そこで、2009年度に新カリキュラムでの「臨地実習」を開始するに当たり、これまでの臨地実習の評価・検証と今後の課題を検討することを目的に公衆栄養学分野の臨地実習を選択した学生の実習の満足度と管理栄養士に対する就業意欲について、未履修者との比較を含めて検討したので報告する。

方法

１．臨地実習単位配分の変更の経緯

（１）2003年度入学生

本学では、実学を重視したカリキュラムを編成している。臨地実習単位の配分は、管理栄養士の業務の基本となるフードサービスの理解を深めるために「給食経営管理論（臨地実習Ⅰ）」に「給食の運営（栄養士必修の１単位）」を含み同一施設で２単位（80時間）、「臨床栄養学（臨地実習Ⅱ）」１単位（40時間）、「公衆栄養学（臨地実習Ⅲ）」１単位（40時間）とし多様な施設で実習することにより視野が広がる事を目的とした。実習施設の組み合わせは「表１　臨地実習単位配分例１」の通りである。

また、学生の希望により臨地実習Ⅰと臨地実習Ⅱを同一施設で実習することを可能とするために、実習期間を４年次前期の同一期間に設定しガイダンスも合同で行った。臨地実習Ⅲについては二種類の実習が終了した後にガイダンスと事前準備を開始できるように4年次後期に実習期間を設定した。

表１　臨地実習単位配分例１

	給食経営管理論（給食の運営を含む）				臨床栄養学	公衆栄養学
	病院	福祉	学校	事業所ほか	病院など	保健所・市町村
A	2				1	1
B		2			1	1
C			2		1	1
D				2	1	1

（２）2004 ～ 2006年度入学生

2006年度の臨地実習では、北海道の病院施設が通常２週間の受け入れが多いため臨地実習Ⅱ（臨床栄養学）の１単位１週間実習期間に対し、指導が難いという評価がだされ検討する必要性が出てきた。また、臨地実習Ⅰ（給食経営管理論）では、学校給食施設での臨地実習を2005年度から導入された栄養教諭制度の栄養教育実習との関わりから、選択する学生を原則教職課程履修者とするなど、学生の進路も踏まえて適切に指導することが必要となった。

さらに、臨地実習Ⅲの実習施設となる道立保健所の学生実習受入総数が限定され他大学と調整により決定することや市町村での実習受入実績が少なく全学生の実習施設の確保が難しい状況となった。そこで、臨地実習Ⅱを臨地実習ⅡA（必修）として臨地実習ⅡBを新設し臨地実習Ⅲとの選択必修に変更した。

以上の経緯から、栄養教諭課程履修者は臨地実習Ⅰと栄養教育実習を連動して、自校方式では同一施設で３週間、センター方式では、学校給食センターで臨地実習Ⅰを実施し、センターの管理栄

養士でもある栄養教諭や学校栄養職員が配置されている小・中学校で栄養教育実習を実施することとした。実習施設の組み合わせは「表２臨地実習単位配分例２」の通りとなり、学生の要望に対応し多様な施設の組み合わせが可能となった。履修の状況としては、臨地実習Ⅰ・ⅡA（３週間)、臨地実習ⅡA・ⅡB（２週間）などの組み合わせを希望する学生が増える中、１週間の病院給食施設での実習は、栄養教諭課程履修者で臨地実習Ⅲを選択した学生（表２のF）などに限定されるようになった。

また、臨地実習Ⅲは「学生の意欲を引き出す臨地実習の取り組み」[3)]の報告を踏まえ、実習施設の中心を市町村役場または保健センターとし、実習日程には栄養教育の体験を組み込み実施した。このことは、学生個々が実習地域の特性を分析し対象者に合わせた栄養教育の展開技術を持っていることが求められ、臨地実習Ⅲの事前学習と事前準備の内容の充実と指導場面を想定した実践的な指導を行うことにつながった。

表２　臨地実習の単位配分例２

	必修科目					選択必修科目		
	給食経営管理論（給食の運営を含む）				臨床栄養学	臨床栄養学	公衆栄養学	栄養教諭
	病院	福祉	学校	事業所ほか	病院など	病院など	保健所・市町村	学校
A	2				1	1		
B	2				1		1	
C		2			1	1		
D		2			1		1	
E			2		1	1		1
F			2		1		1	1
G				2	1	1		
H				2	1		1	

２．臨地実習の流れ

本学の臨地実習では、各専門分野の臨地実習を積み重ねていくことにより学びを深め、実践力につながるとの考えから給食経営管理論→臨床栄養学→公衆栄養学の順に履修できるように調整を行っている。また、専門分野の各教育内容を包含する総合演習の「管理栄養士活動演習Ⅰ」では、専門分野の科目を横断的につなげと管理栄養士の業務を理解する演習の他に後半は臨地実習の事前学習を行っている。

（１）臨地実習希望調査

「管理栄養士活動演習Ⅰ」の授業を通して管理栄養士の施設による業務の特徴を学び、学生個々の進路と学びの内容を結びつけることとなる。また、臨地実習Ⅰ,Ⅱの実習施設の特徴は、過年度の臨地実習報告書により把握し、臨地実習Ⅲの実習内容と特徴は報告会参加により理解を深めている。これらの学習をもとに、学生個々が臨地実習施設と選択必修科目の決定を行っている。

なお、臨地実習希望調査は、３年次の11月に履修要件の説明と合わせて選択必修科目の希望調査を実施し、臨地実習ⅠA･B,ⅡA,ⅡBの実習施設の希望調査を実施した。

臨地実習Ⅲの実習施設の希望調査は、履修希望者に対応した実習受け入れ施設が決定した５月に実施した。

（２）臨地実習ガイダンス及び事前学習

臨地実習ⅠA･B,ⅡA,ⅡBのガイダンスは「管理栄養士活動演習Ⅰ」の授業が終了後の２月上旬か

ら３月末までに３回、４月以降は週１回対象学生全員に対して実施した。なお、実習課題の決定及び準備などに対する個別指導は、科目担当教員が空き時間の中で行った。

臨地実習Ⅲのガイダンスは５月末に全員に対し実施し、７月以降は実習施設毎にオリエンテーションを実施した。また、臨地実習Ⅲの事前学習は実習開始約２カ月前より「事前学習ノート」[4)]に沿って実習内容に関する学習の取り組みを始め、実習課題はグループ内で共通理解した実習地域の概況をもとに決定し、必要な知識の復習と臨地実習期間に実施する栄養教育の準備として、指導教材の作成と学内で数回のデモンストレーションを行ってから臨地実習に臨んだ。

（３）実習施設での実習及び巡回指導

臨地実習ⅠA･B,ⅡA,ⅡBの実習期間は、６月第１週の月曜日から５週間の間で設定している。実習期間中は、健康栄養学科教員が分担し全ての実習施設に巡回指導のために訪問している。

臨地実習Ⅲの実習期間は、８月最終週の月曜日から10月最終週の金曜日の間で受け入れ施設の事業と照らし合わせ５日間を設定している。実習期間中の巡回指導は、最終日の総合カンファレンスに合わせ科目担当教員が中心に訪問した。

（４）事後学習及び報告会

臨地実習ⅠA･B,ⅡA,ⅡBの事後学習は、後輩へのメッセージを含む実習報告書を作成し学校保管とした。実習報告会はクラスごとに７月に開催しグループ討議により実施した。

臨地実習Ⅲの事後学習は、実習報告書を作成し学校保管の他に実習施設に礼状とともに送付をおこなった。実習報告会は、10月と11月に３年生と４年生全員を対象に、配布資料の作成とプレゼンテーションソフトを用いた発表を実施した。

３．調査方法

（１）アンケートによる調査

①調査対象と期間

調査対象者は2008年度と2009年度に北海道文教大学人間科学部健康栄養学科4年在学中で臨地実習選択必修（ⅡB及びⅢ）履修者述べ260名で、有効回答者数は192名で有効回収率73.8％であった。調査日程は2009年３月から11月の期間に３回、質問紙による選択肢（一部記述式）で実施した。

表５　調査実施日別回収数　　人数（％）

年度	調査実施日	対象者数	有効回収数	臨地実習Ⅲ履修者	臨地実習Ⅲ未履修者
2008	2009年　2月 3日	１２１	７３(100)	４３(58.9)	３０(41.1)
2009	2009年10月16日	１３９	１０３(100)	２７(26.2)	７６(73.8)
	2009年11月13日		１６(100)	２(12.5)	１４(87.5)
合　計		２６０	１９２(100)	７２(37.5)	１２０(62.5)

調査内容は、臨地実習Ⅲ履修者に対しては、選択した理由､実習の満足度など２項目を設定した。臨地実習Ⅲ未履修者に対しては、選択しなかった理由、報告会に参加した感想など２項目を設定した。共通項目として管理栄養士の職業に対するイメージの変化、管理栄養士として就業したい気持ちなど２項目を設定した（資料１）。また、満足度は「非常に満足した」を５点、「まったく満足しなかった」を１点と配点し2006年度調査結果[3)]との比較を行った。

（２）評価表による調査

学生の「自己評価表」を用いて、実習目標毎に各項目４段階で評価を行った[5)]。各目標の達成度を自己評価表の「A」を５点、「D」を２点と配点し評価を行った。

調査対象は、2006年度から2009年度の間の臨

地実習Ⅲ履修者254名である。

（３）統計解析

学生の実習満足度と実習目標毎の評価点について、臨地実習Ⅲを必修とした2006年度実習学生と選択必修の期間の実習学生の比較と管理栄養士の職業に対するイメージの変化と就業意欲について臨地実習Ⅲを履修した学生と履修しなかった学生を比較し、その差異についてマン・ホイットニ検定により解析した。統計的有意水準を５％とした。

統計ソフトは、エクセル用アドインソフト「Statcel ２」[6] を用いた。

結果と考察

１.臨地実習履修の状況

各臨地実習は、履修要件に沿って履修され、年度別臨地実習履修者数は表６の通りとなっている。

臨地実習Ⅲの履修者数は減少傾向にあり３年間で延べ158名となり選択必修履修者の36.7％であった。

表６　年度別臨地実習履修者数

	2007 年度	2008 年度	2009 年度	合計
臨地実習ＩA･B	１７３	１３２	１４８	４５３
臨地実習ⅡA	１７３	１１７	１４１	４３１
臨地実習ⅡB	１０２	６３	１０７	２７２
臨地実習Ⅲ	６８	５８	３２	１５８

２．選択必修科目の選択理由

臨地実習Ⅲを履修した者（以下履修者）の選択した理由では、「公衆栄養に興味があった」が最も多く56名（77.8％）、次に「栄養教育を体験したかったから」22名（30.6％）であった。その他として「管理栄養士の業務の全てを体験したかった」６名、「地域住民に近い仕事に就きたかった」１名、「地域の人と関わりたかった」１名であった。積極的に管理栄養士業務の体験を望み選択したことが伺える。ただ、選択必修のため「臨床栄養学が苦手だったから」の理由で選択した者は３名（4.2％）であった。

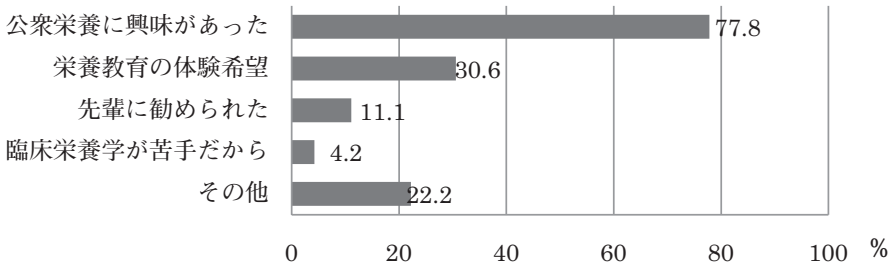

図1　臨地実習Ⅲを選択した理由（ｎ＝72）

臨地実習Ⅲを履修しなかった者(以下未履修者)の履修しなかった理由は、「臨床栄養の方が、興味関心が高かったから」が最も多く67名（55.8％）であった。次に「夏季休暇を実習準備に費やしたくなかったから」で32名（26.7％）となっている。その他として「国家試験の勉強を理由とする者」４名、「就職活動を理由とする者」４名、「卒業研究を理由とする者」１名、「知識不足を理由とす

る者」１名であった。臨地実習Ⅲの事前準備に費やす時間が他の臨地実習よりも長く、内容の充実が求められることから負担が大きいと卒業生から伝えられていることも影響していると考える。

しかし、未履修者が臨地実習Ⅲ報告会に参加して、20名（16.6％）が「自分も履修すればよかったと思った。」と回答していることは、選択を決定する時点で実習内容を十分に理解されていないことや、自ら努力を惜しまずに一歩を踏み出せなかった学生もいたのではないかと思われる。

臨地実習の選択においては、より学びたい分野や進路希望を考え科目を決定することを指導しているが、最後の夏休みを楽しみたい、早く就職活動に専念したい、大変そうなことはやりたくない、などの声を多少ならず耳にすることから、学生の一部には履修決定理由の優先順位が教員の想いとは一致していない者がいるのではないかと考える。

そして、管理栄養士養成校として学生が何を身につける必要があり、そのために学ぶことは何であり、その学ぶ場所がどこであるのかを教員全てが共通認識を持ち学生に接することも不可欠だと考える。

臨地実習に選択科目を設定したことは、今日、大学が全入時代を迎え現場の指導管理栄養士の「管理栄養士になりたい学生のみを受け入れたい。」という要望に応え、真にやる気のある学生を抽出する一方策にも繋がるのではないかと考える。

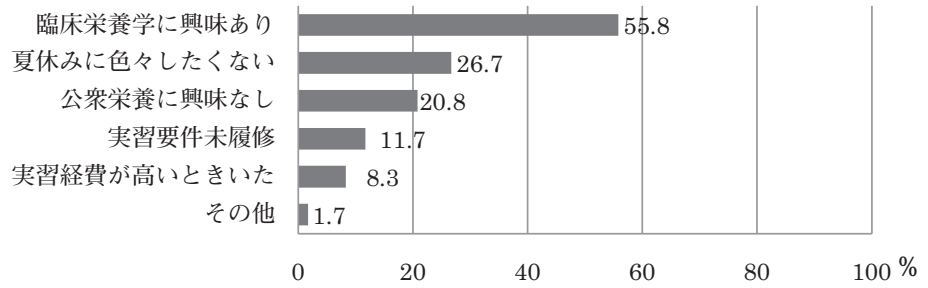

図2　臨地実習Ⅲを履修しなかった理由（n＝120）

３．臨地実習Ⅲ履修者の満足度と目標の達成度

実習に対する満足度は、「非常に満足した」49名で履修者の68.1％、「まあまあ満足した」22名（30.6％）であった。

また、2007年から2009年臨地実習Ⅲ履修者の満足度評価点数の平均値は4.65±0.56であり、2006年度の保健所実習者の満足度評価点（平均値4.16±0.86）[3)]と比較した結果では有意差が認められたが2006年度の鷹栖町で実習した学生満足度評価点（平均値4.76±0.44）[3)]との比較では有意差が認められなかった。このことは、選択必修で履修した学生は鷹栖町で実習した学生と同様に、実習プログラムが学生の積極性を引き出し満足度の高い内容であったことを示している。事前学習や準備に時間をかけて臨地実習に臨むことや栄養教育の企画から体験することが実習の満足度に繋がっていると考える。また、事前学習は他分野の臨地実習での学びを基本として展開されていくため臨地実習Ⅲが本学での最後の臨地実習と位置付けていることも満足感に影響を与えていると考える。

臨地実習Ⅲでは、実習目標を３項目設定している。目標1は、「地域住民の健康・栄養問題や課題を地域特性や社会背景と関連して考察できる。」目標２は、「個別支援、集団支援・地域への支援の特徴と組み合わせた支援について理解できる。」目標３は、「地域における社会資源の理解と地域住民・専門他職種や他機関との連携の必要性を理

解できる。」[5] である。

自己評価による目標別の評価点数の平均値は表７に示した通りである。目標毎に、必修で履修した2006年度学生の評価点数と選択必修で履修した2007年度から2009年度間の学生の評価点数を、比較した結果では、すべての目標において有意差が認められなかった。このことは、実習目標の達成には履修の選択は影響しないことを示し、事前学習の取り組みが影響しているのではないかと考える。

臨地実習Ⅲにおける満足度が、学生個々の達成感に繋がり実習報告会において自信をもって参加者に伝えている姿から、未履修者の48名（40.0％）が「発表者の成長を感じた。」とアンケートに回答している。

表７　目標別評価点

Mean±S.D	２００６年度 (n=96)	２００７年度 (n＝68)	２００８年度 (n＝58)	２００９年度 (n＝32)
目標１（10 点満点）	8.56±0.95	8.37±1.06	8.74±1.07	8.69±1.06
目標２（15 点満点）	12.94±1.25	13.16±1.38	13.17±1.31	13.26±1.24
目標３（10 点満点）	8.77±1.05	8.63±1.06	8.81±1.05	8.94±0.76
総　合（35 点満点）	30.27±2.51	30.16±2.83	30.72±2.84	30.88±2.42

４．管理栄養士の職業に対するイメージの変化

臨地実習体験前後の管理栄養士の職業に対するイメージの変化について「よくなった」と回答した者は94名（50.0％）であった。履修者で「よくなった」と回答した者の割合が72.0％と全体よりも高い割合を示している。管理栄養士の職業に対するイメージの変化を履修者と未履修者で比較した結果では、有意差が認められた。

「よくなった」内容として履修者は、「業務の幅広さ」「住民との関わりに魅力を感じた」と述べている。指導管理栄養士が住民と関わっている姿や実際に栄養教育を体験したことが他の臨地実習の指導栄養士からは学べなかった内容であり、住民の生活を支援することが困難ではあるが「楽しい」と感じられる仕事であることが体験できたためだと考える。

また、未履修者は、「仕事のやりがい」「他職種から信頼されている」を感じたと述べている。施設内で他職種と連携して業務を行っている姿や他職種の評価から、施設における食事の位置づけや食事の重要性を理解することができたためだと考える。

悪くなった内容としては、「業務に追われ殺伐としていた。」「施設側と受託業者との関係」を挙げている。

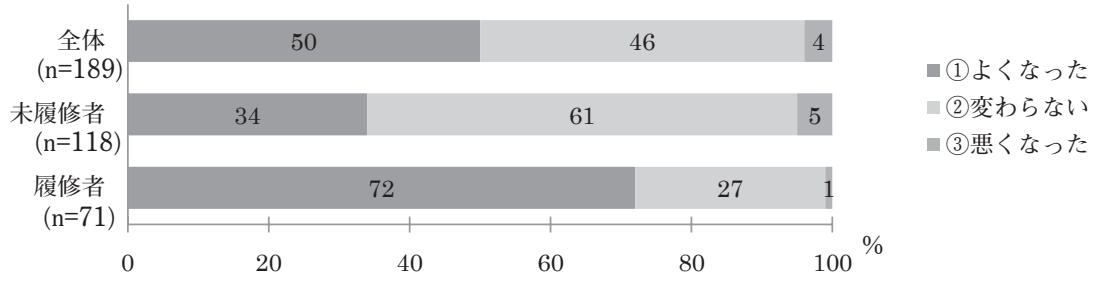

図３　管理栄養士の職業に対するイメージの変化

５．管理栄養士の就業意欲

管理栄養士として就業したい気持ちについての問いに対し「非常になりたい」は全体で75人(39％)、「まあまあなりたい」55人（29％）であった。約７割の学生が管理栄養士としての就業を希望している。さらに、履修者の就業希望は高く、「非常になりたい」が64％、「まあまあなりたい」と合わせると88％となる。また、未履修者では、「あまりなりたくない」「まったくなりたくない」と回答した者が合わせて18名（15％）であった。管理栄養士の就業意欲を履修者と未履修者で比較した結果では、有意差が認められた。

臨地実習で体験した管理栄養士の業務や指導管理栄養士の姿が就業意欲に大きな影響を与えていることは言うまでもないが、多様な管理栄養士の職務をどれだけ体験できたかも就業意欲を高めることに繋がっていると考える。

また、本学の臨地実習では基礎となる栄養学の教育と実践する教育を連動させるために、各分野の臨地実習が連携を持ちながら体系的に学びを深められるように実習時期の調整を行っていることが多様な管理栄養士の職務を整理しながら理解を深めることとなり就業意欲にも繋がっていると考える。

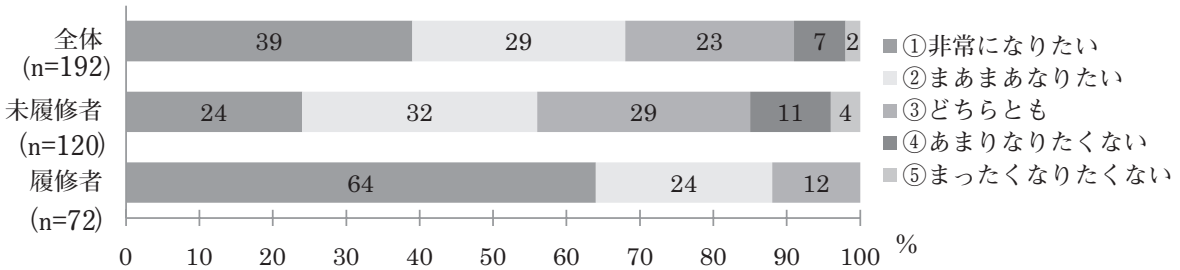

図４　就業意欲について

まとめ

国際栄養士連盟が国際的共通認識としての臨床研修500時間を最低必須条件として提唱していることから、時代の要請に即応した管理栄養士の臨床研修のあり方を日本の養成においても現在の臨地実習を踏まえて検討が進められている。

本学の臨地実習で、限られた時間をより効果的に、意欲的に学生が取り組むための体制を整備するために、これまでの臨地実習の評価・検証を行い、今後の課題の検討を行うために学生にアンケート調査を行った結果、臨地実習選択の違いにより管理栄養士の職業に対するイメージの変化と就業意欲に差異がみられた。

公衆栄養学分野の臨地実習を選択した学生は、「公衆栄養学に関心があった。」他に多様な管理栄養士の職務を積極的に体験することを望んでいることが分かった。

事前学習や準備を丁寧に取り組み、栄養教育を体験することが臨地実習の満足度や目標達成につながり、管理栄養士としての就業意欲に繋がることが分かった。また、各分野の臨地実習が連携を持ちながら体系的に学びを深めて行くことが養成教育と実践活動の融合を図るために重要であることが分かった。

積極的に様々な体験に取り組む意欲的な学生が、臨地実習Ⅲを選択していることがベースにあるとの考えもあるが、管理栄養士の幅広い業務の体験や住民と直接関わることによって更に意欲を高めることに繋がっていると考える。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、学生の臨地実習でご指導いただいた管理栄養士の皆さま、調査に協力いただきました北海道文教大学人間科学部健康栄

養学科４年生の皆さまに深く感謝申し上げます。

引用文献

１）（社）日本栄養士会・（社）全国栄養士養成施設教会編：臨地校外実習の実際－改正栄養士法の施行にあたって－,P2-P3（2002）
２）（社）日本栄養士会：日本栄養士会雑誌 Vol.52　No.6,P34-P40（2009）
３）手嶋哲子・侘美靖・田中律子・安田直美：学生の意欲を引き出す臨地実習の取り組み－鷹栖町における公衆栄養学分野の臨地実習の取り組み－,北海道文教大学研究紀要第31号,P137-P149（2007）
４）手嶋哲子：北海道文教大学人間科学部健康栄養学科　臨地実習Ⅲ（公衆栄養学）事前学習ノート（2007）
５）手嶋哲子：北海道文教大学人間科学部健康栄養学科　臨地実習Ⅲ（公衆栄養学）学生ポリシー＆プロシージャーハンドブック,P1-P2,P7（2007）
６）柳川久江：４Stepsエクセル統計　第２版,（有）オーエム出版、P88-P93,P227-P230（2006）

参考文献

１）木戸詔子・福井富穂：臨地・校外実習のてびき,（株）化学同人社（2005）
２）北海道文教大学人間科学部健康栄養学科：臨地実習Ⅰ・Ⅱ　学生ポリシー＆プロシージャーハンドブック（2009）
３）北海道文教大学：学園生活の手引き（2003）
４）北海道文教大学：2007学生便覧（2007）
５）栄養調理関係法令研究会　編集：平成22年度版　栄養調理六法、新日本法規（2009）

（2010年１月15日受稿）

資料 1

臨地実習に関するアンケート(学生用)

今後の授業の参考にいたします。該当する番号に○印をつけてください。

1.あなたは、臨地実習Ⅲを履修しましたか。
①履修した　　⇒　設問 2.3.6.7 を回答ください。
②履修しなかった　⇒　設問 4.5.6.7 を回答ください。

2.あなたが臨地実習Ⅲを、選択した理由に当てはまる項目に○印をつけてください。(複数回答可)
①公衆栄養に興味関心があったから　②栄養教育を体験したかったから
③先輩に勧められたから　④臨床栄養学が苦手だったから
⑤その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

3.あなたの臨地実習Ⅲの満足度はどのくらいですか。
①非常に満足した　②まあまあ満足した　③どちらともいえない　④あまり満足しなかった
⑤まったく満足しなかった

4. あなたが臨地実習Ⅲを、選択しなかった理由に当てはまる項目に○印をつけてください。(複数回答可)
①公衆栄養に興味関心がなかったから　②臨床栄養の方が、興味関心が高かったから
③夏季休暇を実習準備などに費やしたくなかったから
④実習要件の科目が未履修のため　⑤費用がかかると聞いていたから
⑥その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

5.臨地実習Ⅲの報告会に参加した感想で、当てはまる項目に○印をつけてください。(複数回答可)
①臨地実習Ⅲを履修した学生のみの参加で良いと思った
②保健所や保健センターの業務の理解が深まった
③発表者の成長を感じた　④自分も履修すればよかったと思った
⑤その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

6.臨地実習を、体験する前と今では、管理栄養士の職業に対するイメージに変化はありますか。
①良くなった
具体的な内容を記入ください（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）
②変わらない
③悪くなった
具体的な内容を記入ください（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

7.あなたの管理栄養士として就業したい気持ちは,5 段階で表すとどの位ですか。
①非常になりたい　②まあまあなりたい　③どちらともいえない　④あまりなりたくない
⑤まったくなりたくない

臨地実習全般に対する感想や意見などありましたら自由に記入ください。